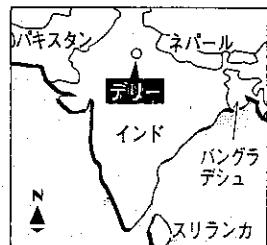


ピープルの地平へ

世界の市場化に抗して

[13]



に何も残らなかった。貯めようなんて考えもしなかつたよ。でもバルビカス銀行のメンバーになってからは、稼いだお金を貯めるようになつたんだ。インドの首都アリーの路上で屋台を開いて働く十歳のスマン君は誇らしそうに言つ。

路上で働き暮らす子どもたちの多くは、稼いだお金や安全に手元に持つておける手段がないため、その日使いきってしまう。明日のことなど考へるすべもなく今日を生きることを始めた。

「バルビカス銀行（子ども開発銀行）」だ。「バタフライズ」というNGOが二〇〇一年にアリーで、子どもたちと一緒に試行錯誤で始めた。

バルビカス銀行は、路上で働き暮らす子どもの経済的な自立を支援するため、お金を預かって、貸始めた。

「一日の終わには手元に何も残らなかつた。貯めようなんて考えもしなかつたよ。でもバルビカス銀行のメンバーになってからは、稼いだお金を貯めるようになつたんだ」。インドの首都アリーの路上で屋台を開いて働く十歳のスマン君は誇らしそうに言つ。

強いられている。多少のお金を持っていても、寝つく頃にはおとなや年上の子に取られてしまう。子どもたちがそのような状況から抜け出し、稼いだお金を日々の生活や将来のために役立てられるようにしようと設立されたのが

強いてはいる。子どもたちによる起業の支援にも取り組んでいる。預金は十歳以上、貸し付けは十四歳以上で、預けたいと思えば、パンクマネジャーと呼ばれる子どものところへ行き、名前と預金額を申告して署名をする。マネジャーは、バイ

し付けを行い、子どもたちの銀行の運営にも子どもたちが参加している。例えばある子どもがお金を抜くと、預金はもじろ・5%である。

銀行の運営にも子どもたちが参加している。預金は十歳以上、貸し付けは十四歳以上で、預けたいと思えば、パンクマネジャーと呼ばれる子どものところへ行き、名前と預金額を申告して署名をする。マネジャーは、バイ

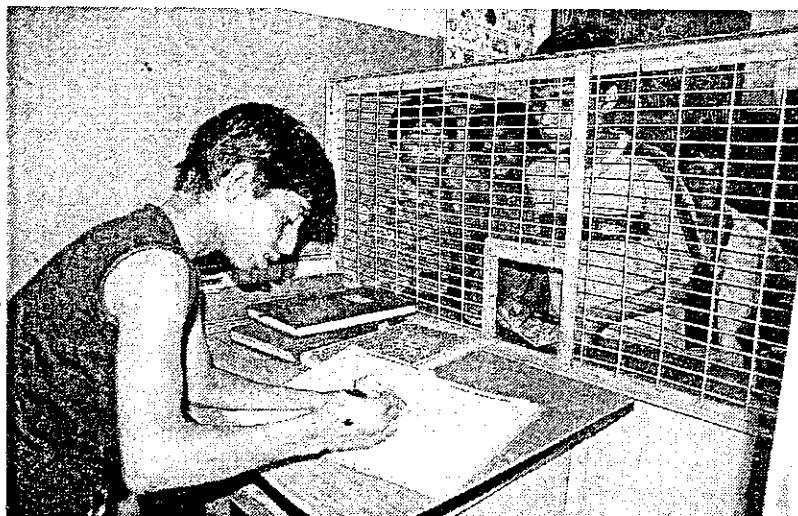
中山 実生

インド 路上で暮らす子どもの銀行



【なかやま・みおり】子どもの権利活動家。一九七七年、広島県生まれ。国際子どもの権利センターワークを経て、現在はインド・バンガロールを拠点に活動。著書に「内発的発展と教育」(共著)など。

絶対的貧困脱出への一步



の基礎的なトレーニングも受けており、おとなと一緒に銀行の会計にも携わっている。

貸し付けの審査をする委員会は、五名が四十一十九歳、四名が十三歳の計九人の委員で構成されている。貸し付けにあたっては、預金額が貸付額の10%以上なければならない、親や兄弟姉妹、親戚のためにお金を借りることはできない、などの条件がある。また、ジネスのためには貸し付け

銀行を利用する子どもの中には、お金を貯めて両親のために家建てた子どももいる。路上で生活をしている子どもたちは、道に落ちているふきぐすり拾う仕事を主にしているが、

銀行が貸し付けをするようになってからは、資金を得て、カセットテープやCD、ハンカチなどを売る小売店を始めるようになつた。

子どもたちに定期的にミーティングに参加してもらい、銀行に関心を持ち続けてもらうこと」だといふ。

「メンバーや増やすこと、子どもたちに定期的にミーティングに参加してもらい、銀行に関心を持ち続けてもらうこと」だといふ。

「メンバーや増やすこと、子どもたちに定期的にミーティングに参加してもらい、銀行に関心を持ち続けてもらうこと」だといふ。

そのような状況下にある子どもたちが少しでも人間らしく生き、教育や自由の権利を取り返していくには、子どもたちに新たな生き方の選択肢を示していくことが必要だ。バルビカス銀行の取り組みに対しては、「児童労働を固定化する」という批判があり、議論の余地を有するが、絶対的貧困をまずは脱出する

ことは、「児童労働を固定化する」という批判があり、議論の余地を有するが、絶対的貧困をまずは脱出するには、六千人の子どもが利用しているという。国際労働機関(ILO)が今年発表した世界の児童労働者数は三億一千八百万で、二〇〇〇年の二億四千六百万人より11.3%減った。しかし、インドでは逆に、一億人から一億二千七百万人に増えている。クローバリゼーションを因とする急速な経済発展が国内の絶対的な貧富の格差の拡大に拍車をかけていることが、その背景にあ

いる。現在、デリーのバルビカス銀行を利用している子どもは千二百人。印度の他の都市、スリランカ、ネパール、パキスタン、パンジネスのためには貸し付け

バルビカス銀行にお金を預ける子どもたち。記帳するのはパンクマネジャーのアーヴィング・デコーー中

設立され、南アジア全体で

(毎週月曜日)掲載します)